

## 研修医・指導医リレーエッセー②



# 患者様に『向き合う』ということ

岡山ろうさい病院 整形外科部長 金丸 明博

岡山ろうさい病院整形外科の金丸明博と申します。この度は素晴らしい企画への執筆の機会をいただき、誠にありがとうございます。

私には忘れられない症例があります。20代女性の下肢血管損傷症例です。自分がまだ専門医試験を終えたばかりの頃でした。筋損傷ということで受けたその症例は、画像検査の結果膝窩動脈損傷が判明しました。血管外科に相談しバイパス術が行われましたが、残念ながら徐々に下肢の壊死が進行し切断を余儀なくされました。切断術の必要性を本人に伝えたとき、私が想像していたよりも気丈に「分かりました。仕方がないですね。」と答えました。



その後、彼女は義足での生活にも慣れ、ずっと私の外来に通ってくれました。約7年間外来で診させていただきましたが、今でも私の中には「あの時自分がより良い判断をしていれば」という思いがあります。

この症例を通して、自分はこの先ただ患者の外傷を治療していくわけではなく、その方のその後の人生にも関わっていく可能性があるのだと実感しました。

『なにごとにも準備が8割』。これは私が研修医時代に指導医の先生から言われた言葉です。また同様のことを整形外科医になってからも上司から言われました。手技や手術を行う際には、準備が最も重要であり、準備がしっかりとできていれば実際の手技も大きなトラブルなく終えることが出来る、という意味です。しかし、私が専門としている外傷の分野においては、手技や手術のみではなく、日常診療において常に意識していなければいけないことだと思います。外傷は突然起こります。そしてその患者さんが目の前に来た時の自分自身の判断や、自分の行う手術によって、その方のその先の人生も変わる、そういう分野です。

医師17年目になり、若い先生方に指導させていただく機会も増えました。「先生のプランは？」若い先生が症例相談に来た時には、私は必ずこの質問をします。ただ治療方針を教えてもらうだけでは何も身に付きません。自分のプランを持ち、そのうえでそのプランが正しかったのか、どこを修正すべきだったのかを学んでいただきたいと思います。また、自分自身のプランを持つために、知識と経験に貪欲になってもらいたい。

「自分は納得がいくまで十分治療方針を考えたか。中途半端な状態で治療に臨み、もし上手くいかなかった時、自分が後悔しないか、その治療の責任をとれるのか。」患者様に真摯に向き合いつつ、この思いを忘れないでいただきたい。

もちろん研修医の先生方も、忙しい日々のなかで業務に追われてくることも多いと思います。手を抜くことは簡単です。しかし、終わった治療は元には戻せません。後悔のしないよう、その時の自分自身にできる最大限の治療計画をもって患者様に向き合ってください。

「先生のプランは？」＝「先生はこの患者の治療に責任をもって向き合えますか？」

これが私からのメッセージです。